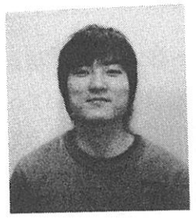


神社本殿建築の時代的変化に関する研究
ー甲府市住吉神社を中心にー

K03104　中村　嶺太

1．研究の背景と目的

神社信仰（神道）は日本民族の唯一の宗教的思想である。もっとも古い時代には神社建築は存在しておらず、人々が集まって祭りを行うことで信仰を表現していた。また、特定の山や樹木などを信仰の対象としているものもあったようだ。

神社信仰に建築が用いられるようになってからこれまでに、その建築の屋根の形状や平面構成などに様々な形式が見られるようになった。

一方、近年の市町村合併により市指定等の文化財を見直す動きが始まり、今回は甲府市にある神社建築を調査する機会を得た。

本研究では、実測調査を行った甲府の住吉神社を対象とし、全国にある住吉神社をリストアップし、主にそれらの平面構成について比較し、神社建築の時代的な変化を把握する。そして、「木割」等の考え方により、神社建築の設計手法を理解し甲府の住吉神社がどのように設計され、どのような位置づけにあったのか、建築と信仰の双方から考察したいと思う。

2．研究の方法

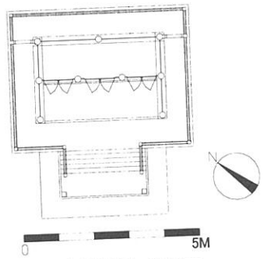
①国宝・重要文化財のほか、近世社寺建築調査報告書より全国の住吉神社をリストアップし、14世紀から順に19世紀まで分類し、平面構成の変化を把握する。
②さらに神道全般、住吉信仰について理解を深める。
③山梨県甲府市の住吉神社（調査済み）、その他の遺構の調査を実施し、建築の時代的、地域的特徴を分析する。
④実測データをまとめ、「木割」の考え方にそって実測値をもとに建築の各部材寸法、それぞれの距離などを分析する。
⑤住吉神社、五社神社について木割の比較をし、多間社入母屋造の社殿に関する考察をする。

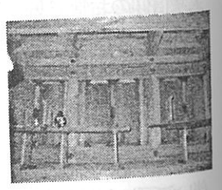
3．実測調査について

今回甲府市において実測調査を実施したのは三棟である。三つの社殿に共通しているのは、入母屋造であることと、多間社の割りと規模が大きなことである。

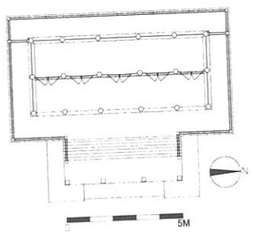
【表1】調査対象神社一覧

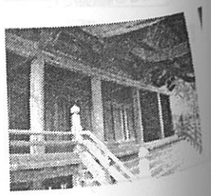
神社名	形式	建立年代
住吉神社	四間社入母屋造 側面二間	寛文８年(1668)
佐久神社	三間社入母屋造 側面二間、背面二間	嘉永６年(1853)
五社神社	五間社入母屋造 側面二間	文政３年(1820)





【図1】佐久神社本殿　平面図
【写真上】本殿外観
【写真下】内陣部扉





【図2】五社神社本殿　平面図
【写真上】本殿外観
【写真下】向拝部

指導教員　伊藤　洋子　教授

4．神社建築について

4－1　形式について

神社本殿の建築様式で代表的なものは、「流造」、「春日造」、「住吉造」、「入母屋造」などがある。「住吉造」は、わが国最古の神社建築の形式である「大社造」が発展してできたものである。屋根は直線的であり、切妻造で妻側を正面とする。「春日造」は「住吉造」から変化したものであり、屋根に曲線を用いるようになった。規模は大きくはない。「流造」は伊勢神宮に見られる神明造に一方の屋根の流れを伸ばして向拝（庇）を設け、屋根は曲線である。規模は様々だが、三間社のものが多くなっている。「入母屋造」は屋根形状が入母屋である。規模の大きな神社がほとんどである。現在、国宝・重要文化財に指定されている神社本殿を形式別に分類すると【表２】のようになり、流造が圧倒的に多く、春日造がそれに次いで多くなっていて、その他の形式はわずかだ。

【表２】神社本殿の形式別・時代別棟数一覧

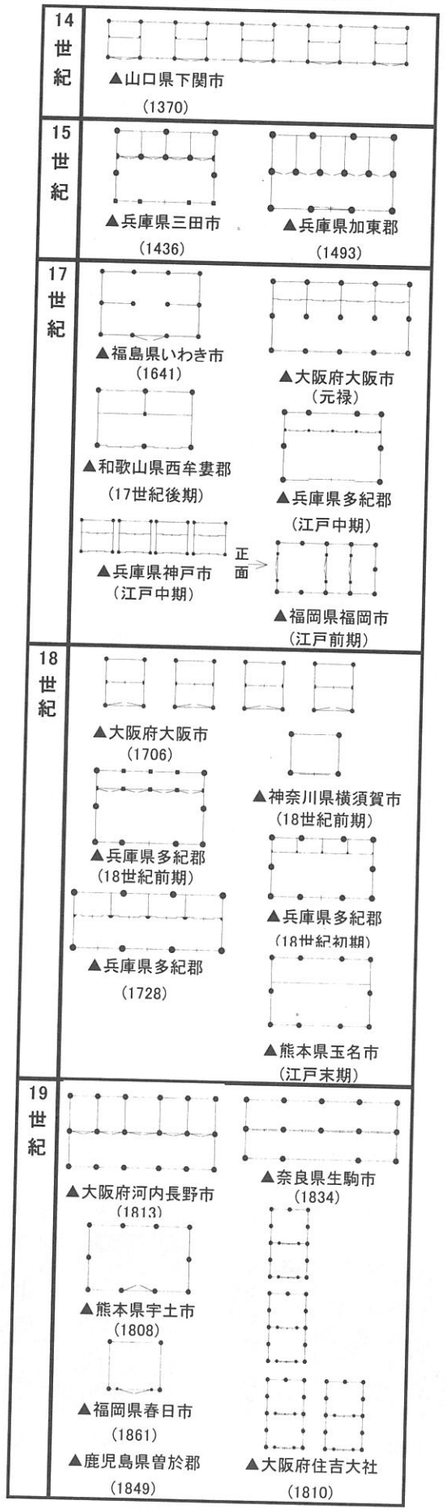
	古代	中世	近世
流造	1	167	84
切妻造	0	5	13
春日造	0	65	25
入母屋造	0	25	40
その他	0	1	21

4－2　平面構成について

本来の神社の平面はシンプルに一室で構成されていて、そこに１体の神体を祀っていた。しかし中世に入ると、１室を前後に二分割し内陣外陣の形をとるものが現れ、さらに内陣側を縦に分割して部屋の数を増やした本殿が多くなった。住吉神社に関しては、もっとも古い形式のものは、四棟の独立した本殿からなる大阪府の住吉大社である。そして１４世紀には五棟の本殿を連結した形式が現れる。これも神社建築の祖形の一つであると考えられる。一部に古い形式も見られるが、これ以後は内陣を数室に分けたものが多くなっている。以下に住吉神社の各時代における平面のリストを示す。

なお、図面の縮尺に関しては統一しておらず、平面の構成が分かるように描いたものであり、向拝(庇)等と類似した形式は省略した。また、16世紀のものに関しては該当する神社が管見に入らなかったため、リストには載せていない。図はすべて下側を正面としている。

【表３】住吉神社平面年代別リスト



5．住吉信仰について

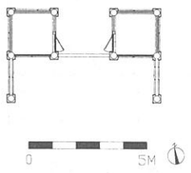
神社信仰とは、もともと田畑の豊作を願うものであり、人々の願いから自然的に発生したといえる。それが、神話に出てくる神々を祀り、それぞれの土地の守り神として存在しているのである。

住吉の信仰は、大阪の住吉大社をはじめ全国二千数百社の住吉神社の祭神、筒男三神に対する信仰である。『古事記』、『日本書紀』の記述では、これらの神々は海から出現したものであり、海上の安全を守る神様として各地に祀られている。甲府には海は無いが、河川(荒川)を使った水運の神様として祀られていたのであろう。

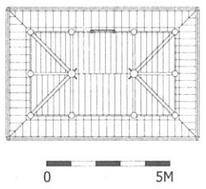
6．甲府市住吉神社の特徴

本研究では、実測調査を行った三棟の中から、住吉神社を対象とする。祭神は、底筒男命(そこつつのおのみこと)、中筒男命(なかつつのおのみこと)、表筒男命(うわつつのおのみこと)のツツノオ三神と息長帯姫命(おきながたらしひめのみこと)（神功皇后）である。四間社の入母屋造であるが、社寺建築では偶数は用いないのが一般的である中、偶数の柱間数を持つ大変珍しい遺構である。また、質のよい彫刻や、朱と黒で塗られた姿は、徳川家が寄進したにふさわしい、とても美しい風貌である。「匠明」などの大工書には、四間社の社殿に関する記述はないが、木割の考え方による設計手法が存在すると考えられる。

また、同神社境内には随身門も建つ。これは十八世紀後半の建築で、大胆な構造、和洋＋禅宗様の意匠を持つ楼門は、早い時期に入る遺構である。

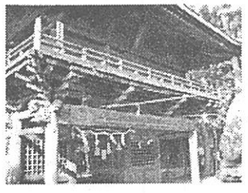


【図3】 随神門 下層 平面図



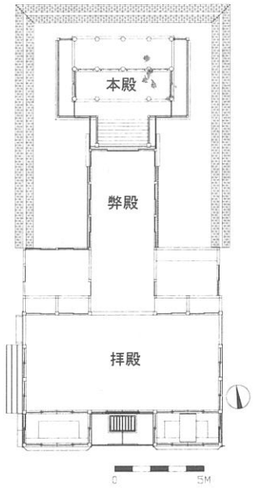
【図4】 随神門 上層 平面図

【写真1】 随神門全景

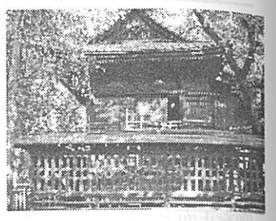


【写真2】 随神門見上げ

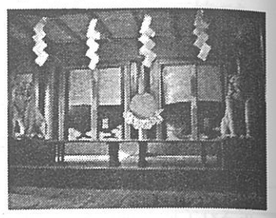
【図5】 住吉神社平面図



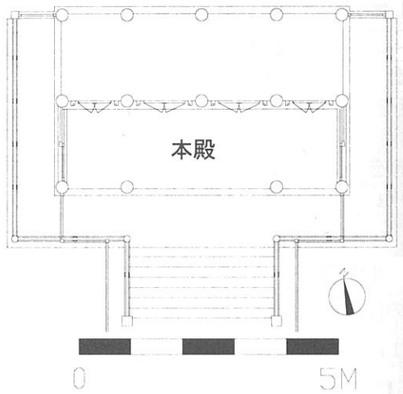
【写真3】 本殿側面



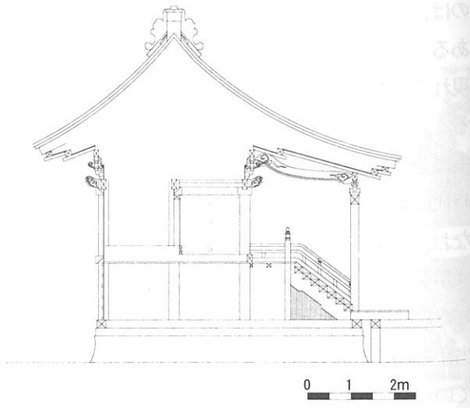
【写真4】 内陣部扉



【図6】 本殿平面図



【図7】 本殿断面図



7．木割について

木割は木砕といわれ、初めは部材の木取りを目的とした技術であった。中世になると、建築を一つの寸法の基準で定めようとする考え方が生まれる。組物の六枝掛の発達に伴い、基準寸法を一枝とし、柱間を基準として各部材の寸法をその倍数で設計する方法、すなわち「木割の制」の成立である。慶長13年（1608年）に、のちに江戸幕府作事方大棟梁となる平内正信によって著された「匠明」には、まず設計の基準として柱間の枝数を定め、その寸算により柱径が算出され、建物の柱間、高さなどの各部材の寸法や造作に至るまでの割り出し方が示されている。

8．木割の分析

実測値をもとに格部材の寸法の分析を行う。以下に「匠明」の木割とともに分析結果の一部を示す。

【表4】「匠明」の木割

「匠明」社記集一間社流造	木割
正面柱間	L
身舎柱太さ	a1=0.1L
長押内法高さ	0.6L
内法長押成	0.6a1
内法長押、柱からの出	0.2a1
頭貫成	0.7a1
頭貫幅	0.3a1

【表5】住吉神社の木割

甲府市住吉神社	実測値	木割
側面柱間	3110	L
身舎柱太さ	240	a1
長押内法高さ	1360	0.44L
内法長押成	170	0.7a1
内法長押、柱からの出	40	1/6a1
頭貫成	235	a1
頭貫幅	120	1/2a1

【表6】住吉神社、五社神社の比較

	住吉神社	五社神社
長押内法高さ	0.47L	0.45L
内法長押成	0.71a1	0.75a1
内法長押、柱からの出	1/6a1	1/7a1
頭貫成	0.98a1	0.73a1
頭貫幅	成の1/2	成の1/2
向拝柱太さ	0.79a1	0.79a1

9．まとめ

神社建築において、屋根形状と平面形式、神社名などの関連性は無いようである。しかし住吉神社の場合は四座の祭神を信仰するものであるため、それが平面の形式に影響を与えていると考えられる。【表3】にもあるように、内陣を四室に分けたものが多い。また古い形式を受け継ぐものでは、独立した四社殿に一座ずつ神体を祀るものも見られる。

また【表2】から、中世から近世にかけて入母屋造の棟数が春日造を超えているのがわかる。これは、それぞれの地域で神社の持つ力が大きくなるにしたがって、社殿の規模も大きくなっていった結果であると考えられる。

甲府の住吉神社は外陣を開放的にする平面形式や、流造より手の込んだ入母屋造、装飾の様式などから考えると、建立当時はいち早く新しい建築様式を取り入れていた神社であるといえよう。随神門に関してもそうである。【表6】は住吉神社と五社神社の木割を比較したものである。建立年代は１５０年ほども離れているが、側面柱間をL、柱太さをa1としたときの各部材の寸法の比率はかなり近い値をとっている。このことから、多間社の入母屋造の社殿は、ある程度統一された設計マニュアルがあったと考えられる。

参考文献

『国宝・重要文化財大全 建造物 上巻』/毎日新聞社/1998年
『日本建築史基礎資料集成 社殿1』/1998年
『近世社寺建築調査報告書集成 全巻』/各都道府県教育委員会/東洋書林
『文化財講座 日本の建築1 古代Ⅰ』/文化庁/第一法規出版/1976年
『文化財講座 日本の建築2 古代Ⅱ・中世Ⅰ』/文化庁/第一法規出版/1976年
『住吉信仰』/真弓常忠/朱鷺書房/2003年
『社寺建築』/広江文彦/金竜堂/1984年
『匠明』/伊藤要太郎/鹿島出版/1992年